

家庭教育力の強化を図る

親子で取り組む梅ちぎり

知多市立佐布里小学校父母教師会

1 はじめに

本校は、知多市のほぼ中央に位置し、明治5年に創立された今年度で148年目を迎えた学校である。全校児童は488名、18学級（含む特別支援学級）の市内では中規模校である。古くから居住している方と宅地開発されて転居してきた方とが混在している地域でもあり、35年ほど前には1,000名を超える児童数であったが、年々、児童数の減少傾向が続いている。



【 本校正門と校舎 】

校区には知多半島を流れる愛知用水の調整池である「佐布里池」があり、池の周辺には桃の木に梅を接ぎ木した「佐布里梅」を始めとする約25種で5,500本を超える梅林が整備されている。この梅林が整備されていく過程で、本校のみが梅の実を収穫することができることとなった。昭和51年に第1回目の梅の実収穫を保護者とともに実施し、以後「梅ちぎり」として毎年6月の第1土曜日を基本に、今年が45回目の実施となっている。

2 研究への取組

(1) 研究のねらい

家庭教育力の強化を図るための手立てとして、本校父母教師会では、この「梅ちぎり」を会の重要な活動の1つと位置付けて取り組んでいる。また、長い間継続してきたことによって、「梅ちぎり」は祖父母、父母、子どもの三世代にわたるものとなっており、保護者が我が子と一緒に活動する機会とすることができている。この取組を通して、家庭教育力の強化に取り組んでいる。

(2) 研究の手立て

家庭教育力の強化に向け、具体的な手だてとして次の2つのことについて取り組んだ。

- ① 地域資源である佐布里梅の親子による「梅ちぎり」と、その販売
- ② 販売による収益金を活用した「梅の実文庫」の充実

3 実践活動の概要

(1) 保護者と共に収穫する「梅ちぎり」

① 事前の計画

佐布里池周辺の土地は県が管理しており、梅林は佐布里池観光開発協会（会長は知多市長）が管理している。そのため、本活動を実施するためには、毎年、佐布里池観光開発協会に活動の実施申請をする必要がある。また、佐布里池梅林自体が観光名所となっているため、収穫時期が近付くと周辺から一般の方々が勝手に収穫してしまう状況であるため、定期的な巡視活動が必要となる。これらのことを父母教師会の役員・理事で行っている。

実施当日は全校児童と全世帯保護者による活動となるため、父母教師会の役員・理事のみでなく校区各地区から選出された委員も含めた事前打ち合わせ会議も2回実施し、安全面の配慮や円滑な活動の実施に向けて取り組んでいる。

また、収穫した梅の実は、知多管内の小中学校や市内の小中学校に勤務する教職員、知多市役所を始めとする市内の公共施設職員、地域住民の皆さん等に販売させていただくことになる。そのため、販売日時や方法、購入希望量についての案内注文文書を事務局で作成し、関係各所に事前配付する。注文の返答をいただき、確認・集計した購入希望量を収穫する目標量として設定し、当日を迎えることになる。

② 収穫当日の活動

収穫活動当日は、交通安全面の確保のため、教師は道路の主要交差点にて立哨し、保護者は通学班の児童とともに佐布里池の集合場所に徒歩で移動してもらっている。人員点呼と全体指導の後、通学団地区ごとに梅林エリアを設定



【 当日の活動の様子 】

し、児童と保護者がともに梅ちぎり活動を実施している。梅の木の低い位置にある梅は手でちぎれるが、高い位置にある梅は棒を使って落とし、児童がバケツに入れていく。時には梅の実が頭に当たったりすることもあり、楽しく親子で協力して収穫している。収穫した全ての梅の実は、トラックで役員によって学校まで運び込まれる。その後、理事・委員とその子どもたちの手によって2.5kg～3kgずつに袋詰めされる。これが例年、約1,400袋ほど作成されることになる。このうち、校内での教育活動に使う梅の実を約70袋程度確保し、それ以

外は梅の実販売用として準備されることになる。

今年度は新型コロナウイルス感染症防止のため、販売は中止としたが、児童が家庭に持ち帰った梅の実の総量は 768kg となった。

③ 梅の実販売

収穫した日の午後は、梅の実販売となる。校区 6 地区ごとに分けた地域住民対象の販売場所と、教職員対象の販売場所の合計 7 箇所を校内に設け、ドライブスルー方式での販売を行う。役員・理事・委員が選出されている各地区からの購入者を担当し、本校教職員が教職員対象の販売場所の担当と購入順路の安全対策を受け持つ。



【 販売時の様子 】

販売価格は 1 袋 500 円としており、値段設定が市販価格よりも大変安価なため、例年、大口の注文をされる方もいる。そのような方には事前に注文された量の他に、多少の「おまけ」も付けて販売しているため、一層のお得感も出ている。昨年度の販売総量は 2.5kg 袋詰めとして 1,195 袋、2,987.5kg となった。

④ 学校教育での活用

佐布里梅は特色ある地域素材であるため、本校の教育活動の中での活用が行われている。収穫した梅を使って、全校が各学級ごとに梅ジュースを作り、暑さが厳しくなってくる 7 月初めには甘酸っぱい味を楽しんでいる。また、2 年生は「梅干し作り」を地域の長寿会の方々を招き、教えていただいている。6 月初めには、爪楊枝でへたをとり、塩と梅を交互にビンに入れて梅を漬け、6 月下旬には、しその葉をきれいに洗って塩もみをし、梅の入ったビンの中に入れる。児童は、緑色の梅が赤紫に色づくのを楽しみにしている。そして、梅が漬かると、それを干し、梅干しにしている。12 月初旬には、2 年生が作ったこの梅干しと 5 年生が育てたお米で「おにぎりパーティー」も行っている。お世話になった長寿会や米作りを教えていただいた米米クラブの方々を招き、歌を歌ったりクイズをしたり、会食したりと楽しみながら感謝の気持ちを表す会を催している。長寿会や米米クラブの方々はその多くが我が子を本校に通わせていた保護者でもあり、本会の OB でもある。そのような方々の支援を受けながら、地域の特産である梅と米をもとに地域のよさを知り、地域の人々と関わりを深めていくことが継続できている。

(2) 収益金を活用した「梅の実文庫」の充実

① 梅の実文庫の歴史

佐布里池観光開発協会と佐布里小学校との申し合わせの中に、梅の実の販売によって得た収益金は、その2割が佐布里梅林の保全に向けた費用として活用され、それ以外は梅に関する郷土学習の充実や児童に還元されることを目的とした児童用図書の購入に充てられることとなっている。この児童用図書のことを「梅の実文庫」と呼び、これまでに購入した書籍数は既廃棄冊数も含めて、総計 13,547 冊となっている。

② 梅の実文庫の選定

梅の実文庫として購入する書籍は、次の要件を満たすものとしている。それは、「保護者の読ませたいもの」「子どもが読みたいもの」である。学習用教材資料や「教職員が読ませたいもの」は公費にて購入が可能である。そのため、教職員の考えや意向よりも保護者や子どもたちの考えや意向が反映されるものを「梅の実文庫」として整備・拡充していくこととしている。そのため、「梅ちぎり」終了後、保護者宛に梅の実文庫として購入したいものの希望調査を実施する。希望集計されたものの中で、まだ購入されていないものを中心に新規購入している。昨年度は 192 冊を購入し、10月から子どもたちが読むことができるようにした。子どもたちは自分が読みたいと思ったものが配架されていることを知ると、放課の時間ごとに図書室に向かい、貸し出し手続きを取っていた。興味を引く本があることで、児童の読書量は多くなっている。



【 自分の興味を引く本を借りる児童 】

また、「保護者が読ませたいもの」があることで、保護者も参加することができる読み聞かせボランティア「梅っ子広場」が結成されており、年間を通して保護者による朝の読み聞かせ活動や、業間の大放課（すくすくタイム）を活用した定期的なお話し会も行われている。

4 おわりに

家庭の教育力は、個々の家庭のみで高められるものではなく、子どもと保護者、地域の方々、教職員が関わり合っていくことで高まっていくと考える。地域の教育資源を活用した、本校の伝統的な活動を推進していく中で、互いに関わり合っていく機会を多く創り出すことで、家庭の教育力を高めていきたいと考える。その先には、子どもと保護者の明るい笑顔があると信じて。